

池田満枝さん（池田勇人元首相夫人）に聞く

# 心の温かい方でした

―聞き手・阿部 穆



黄十字会（長欠児童生徒援護会）の会長夫人として、副会長の大平衆院文教委員長夫妻（中央）と東京・山谷のドヤ街の少年を慰問する池田満枝さん（右端）（1959年7月）

## 池田総理と大平さんとの初めての出会い

——池田（勇人）さんに大平さんが最初に会われたのは、戦争中の東京財務局だったのですか。

池田 そうですね。昭和一九年（一九四四年）に池田が東京財務局の局長になりまして、吉田晴二さんが総務部長、北島武雄さんが直税部長、間税部長が大平さんだったと思います。戦時中でしたので、お料理屋とかが何にもなかったでしょう。それで、役所が終わると、池田はそういう方々を引き連れて、信濃町のこの家で飲むわけです。それで、私は毎日、お野菜を煮ましてね、ほとんど毎晩のように家が料理屋さんの代りになっていたんです。私は、それまで大平先生とお会いしたことがなかったのです、食べ物好みなどは存じませんでした。それで、体格はいいし、よくお呑みになる方だと思つて、ドンドン（お酒を）勧めていましたら、大平先生はトイレに立つてその帰り際に、私をそつと呼ばれて「奥さん、私に余り勧めないで下さい。私は酒が呑めないのだから」と言われました。「ごめんなさい。知らないもので……」ということ、それから、あんまりお勧めしないことになりましたんですけども……。

——体質的に呑めない人なんですかね、大平さんは……。

池田 体質的らしいですね。

——それから、池田さんが大蔵大臣になられた時に、秘書官は最初は黒金（泰美）さんと宮澤（喜一）さんで、後から大平さんがなるわけですね。

池田 そうです。それで黒金先生は、お父様が山形県の代議士だったので、その後を引き継ぎたい

というご希望でしたから、池田が「土、日曜に山形に帰って選挙運動をすればいいから」と言っていて、仙台の（国税）局長にしてあげたのです。その後、（経済安定本部の公共事業）課長で全国を廻っていた大平先生にお願ひすることにし、「すぐ探せ」ということになったのです。九州に出張中の大平さんに「すぐ戻って来るように」という電報を打ったら、「ココロチヂニ、ミダレテ……」という名文の電報が返ってきたんですね。池田は笑って「おー、大平らしいことをやるなあ」と（言いましたね）。以前に津島（寿一）先生の秘書官を宮澤さんと一緒になさっておられましたので、もう（秘書官には）飽き飽きしていらっしやっただんじやないですか。

——それで、池田さんの秘書官になるわけですが、その頃は四谷の小学校が大蔵省だったわけですね。宮澤さんの話だと、秘書官にはなったものの全然、役所にこないというわけですよ。（笑い）

池田 全然でもないけども、まあ当たっていますね。

——その（秘書官になる）時に、池田大臣は「細かいことは大体、宮澤にやらせるから、お前はとにかく（秘書官を）やれ」と言われて、「ハイ、ハイ」と言って引き受けたけど、その大臣の言葉が楯にとつて、「細かいことはやらんでいいだろう」とか、「毎日、行かんでよろしいとか」と言っていて、遊んでばかりいた、という話を宮澤さんは言っていましたよね。

池田 神出鬼没で、朝、ひょいと現れて、何か一口、二口、おっしゃっていたと思うと、すぐ消えていきましたから、「大平、何処へ行ったんだ」と（池田は）言って、腹を立てていましたね。とにかく大物ですよ。

——ところが面白いことに、宮澤さんも伊藤ブーちゃん（昌哉さん）も宏池会の木村（貢）さんも

言っておることは、「池田のオヤジさんは、何か心配事があつたり困つたことがあつたりすると、大平さんの顔を見ないと気持ちが悪まらない。『ちよっと、大平を呼べ』ということがしょつちゅうあつた」と。何か一種の精神安定剤といつちや失礼だけでも、そういう気がしますが……。

池田 ほんと、(池田の)守り神ですよ。(大平先生を)頼りにしましたもの。

——人間的にサイクルが合ったんでしょうか。

池田 そう。それは宮澤さんも伊藤さんも頭はいいけれども、大平先生は人間的な哲学を持つてらつしやつたわね。だから何か困つた時があつたら、あの方、特有の考えを出してらつしやつた。それは、ほんとに感心するくらい……。あの方は、クリスチャンでもあられたということもあるけど、やつぱりもう一皮、孔子、孟子の(中国哲学の)本も読んでらつしやつたんじゃないでしょうか。そういうものが入り交つて、宗教的な哲学的な人間的な考えが、正しい考えが湧いて来たんだらうと思いません。

——そう言えば、池田総理も宗教的な人でしたな。朝、ここで太陽を拝んでおられましたし、閣議の始まる前に必ず手を合わせて、「国のために間違いないように」と祈つておられました。あれ、やつぱり病気をされてからですか、信心深くなられたのは……。

池田 そうですね。それこそ、もう助からないという大病だったでしょう。それが、いろんな宗教に凝つて、迷つてやつてたのが、或る日、突如として(池田の)母親の枕上に御大師さんがお立ちになって、「お前の可愛い子供が大病で苦しんでいるけれども、その子供を連れて、四国八十八カ所を廻ってくるように」と(言われた、というのです)。それが本当なのか、おばあチャマが夢に見たの

か、判らないのですけれどもね。母親は田舎のおばあさんで信心深い人でしたからね。

——それで八十八カ所の全部を廻られたんですか。

池田 いや、全部ではありません。身体に水泡が出て、その水泡からまた水が出るんで、軟膏を塗らなければいけない、塗らなければカリカリに乾いてヒビが出るんですよ。

——本当に奇病でしたな。

池田 そう。珍しい病気ですよ。

——奥様が看病されたわけでしょう。

池田 私は最後の頃です。池田の前の家内が東京で亡くなってね、それから、三五日を済まして、田舎のドイツに留学したこともある立派なお医者様が、「こういう訳の分からない病気というのは、生まれ故郷の気候、風土そして産湯を使った水、田舎式の食べ物、そういうので効き目があれば、ひよっとしたら良くなるかも分からない」とおっしゃったのです。それでも（治るまでには）随分かかりました。

——大蔵省を一回、辞めたような恰好になったのでしょうか。

池田 えー。鹹になっちゃったんですよ。

——後で復職されるわけですよ。それで、話を元に戻しますと、『大平志げ子夫人を偲ぶ』に奥様がお書きになったのを拝見しますと、秘書官の家族を呼んで、お宅でクリスマスの夜に会を毎年されておったということでしたが、それはどんなものでしたか。

池田 そうということがございました。もの不自由な頃でしょう。それでうちはその当時は広島が

ら力キをたくさん送っていたたくし、野菜はあちこちの税務署長さんが届けて下さる、そういうものをふんだんに使って、それと池田が可愛がっていた八木さんという築地の館屋さんが、座敷で秘書官の方々の子供さんにお寿司を握ってくれた、おソバもあればウドンもあつたでしょうから、皆さんから大変、喜ばれましたね。

——それから、奥様の書かれた『大平正芳回想録・追想編』「大平さんの憶い出」のを拝見しますと、或る日、大平さんがお宅の鴨居にぶら下がって何やら言われたとありますが……。

池田 大平さんが茶の間と廊下の鴨居にぶら下がって、「奥さん、僕もいよいよ不惑の年になったからね、これからしつかり頑張らなけりゃいけません」と言われたので、（私も）「あなた、偉くなるのね」と申し上げたことがあります。

——大いに感うというわけですね。（笑い）

池田 だけど、大平さんは、よく勉強してらっしゃったですよ。

——大平さんが政界に出るか出ないかで議論があつて、池田総理が「大平みたいなタイプの男は珍しいから、大蔵省に残って国のために尽くせ」と言われたという意見と、いやそうじゃなくて「あれはユニークな男だから、自分の側において政治家として支えてもらいたい」というふうに思われた、という意見と二つあるのですが、それはどうですか。

大平さんに政界進出を決意させたもの

池田 あの当時、広島県で知事選挙がありましたね、（負け戦で）池田が選挙応援の帰りの寝台車

で寝ようとしていた時に、大平さんが「僕はこんなバカバカしい選挙なんてやらないで、実業家になって、奥さんにうんとお金を差し入れてあげますよ」と言われたことがあります。「あら、そう……。頼もしいお話ですね、じゃ、お願いしますよ」と言って、私はそのまま寝てしまったんですけど……。それから、一週間か二週間ぐらい経ってからかしら、（大平さんは、その）舌の根も乾かないうちに、「僕は立候補します」ということになっちゃったんです。それで池田は、「しょうがない。お前、その気持なら、やれ」ということで……。

——この前、宮澤さんにインタビューした時に、隅田川で池田大臣、大平さん、宮澤さん、登坂（重次郎）さんが屋形舟で舟遊びをした時に、突然、大平さんが、「政界に出たい」と切り出し、池田さんがしばらく考えてから「やりたけりゃ、やれよ」という話をされた、と登坂さんのメモによって話しておられました……。

池田 その辺のはつきりしたことは、存じませんが、やっぱり大平先生の気持が、そういうふうに変わったのじゃないでしょうか。

——だから最初から池田さんを支える、という気持だったんでしょう、政界へ出るということ自体、自分です。

池田 やっぱり池田はわがままですしね、考えの足りないところも多かったです。私が見てもそうなんですから、大平さんのような方がご覧になったら、いろいろ不足な点もあったのではないでしようか。だから、「それを支えていくのは自分しかない」と思ってたんじゃないですか。それは有難いことですよ。

——昭和三五年（一九六〇年）に池田内閣ができて、大平さんが官房長官になるわけですね。その時に、大平さん自身も書いておられるけれども、ここへこられて、奥さんと二人で、「辞める時を考えたほうがいい」と言われたということですが、その通りなんですか。

### 池田内閣の官房長官に就任

池田 それは、池田が総理官邸から「いよいよワシも総理になったよ。お前にも、いろいろ苦勞をかけた」という電話をかけてきたのです。その時に、私は「お目出とうございます」と言って、「まずは、総理になったら、ちゃんと辞める花道を、あなた考えなきゃいけませんよ」と言いました。それが大平さんと話した後かどうか、私、はつきりと憶えていませんね。

——大平さんは、「とにかく、これからは低姿勢でやらなければいけません」と池田さんに言ったと、宮澤さんもブーちゃんも言った、という話が伝わっていますね。

池田 これは本当に大事なことだと思えます。池田は、わがまま、ボンボンで育ってききましたから、皆さんの目から見たら、もっと低姿勢にしなきゃと思うのは、当たり前のことではないでしょうか。

——当時、私たち（新聞記者）は、池田さんがこんなに急に変わられたのは、どうしたのかなと思つたですよ。ゴルフはやらない、芸者が出る料理屋には行かないなど何項目かありましたね。ご本人は悔しいから、箱根の井上さんの所へ行っちゃ、「コンチクショー」と言つて、ゴルフのボールを打つていたそうですね。

池田 そうそう。その当時、池田が山で打ち込んでいるということを知り込んで、財界の方々が古



い汚れたボールをバケツに入れて送って下さいました。池田は箱根へそれを持って行って、井上先生のお庭から「バカヤロー」と言いながら山へ打ち込んでいましたよ。

——その時に、大平さんに「何か総理は、だいぶご不満なようですよ」と言ったら、「いや、あの位でちょうどいいんだ」ということでした。だから、(池田、大平というのは)、コンビとしては非常に良かったんじゃないですかね。

池田 えー。大平さん、宮澤さんが両腕で、それにフーちゃんがいて(池田は)助かったんですね。あれで、無事に何とか(総理が)務まりました。

——それで池田総理が、昭和三九年一〇月、オリンピックの前後に病気になるわけですね。同じ年の九月に私がアメリカに赴任することになり、お暇乞いに総理官邸に行きましたら「喉が痛いので検査に行く。国連総会があるからニューヨークで会おう。今後の日本にとっては中国問題が重要だから、国連総会でこの問題を話すつもりだ」ということを申されておったのです。その翌日、(癌センターに)入院されたから、私は官邸で一番最後に総理にお会いしたのです。また、その時、「声はいつもと同じじゃないですか」と言ったら、「声は同じだが、喉が痛いんだよ」とおっしゃられた。それで癌だと判った時に、党の筆頭副幹事長だった大平さんが、うまく池田内閣の募引きをやって、誰を次(の総理)にするかで、その工作が大変だったという話をされたことがありましたが、その頃は、(大平さんは)しよっちゅう病院にきておられたのですか。

池田 大平さんは、しよっちゅうきてらっしゃいました。あの頃は、政財界の方々が、入れ替り立ち替りおみえになって、自薦他薦が随分あったようですよ。

——それで結局、池田総理の指名ということで、佐藤（栄作）さんが総理になるわけですね。しかし佐藤内閣ができる、大平さんはあんまり佐藤さんに可愛がられないんですね。どうしてなんでしょうか。

池田 まあ、性が合わなかったとしても言うのでしょか。

——池田さんの一番親しい人であったから、やっぱり嫉妬じゃないけれども、こういう人（大平さん）が側にいたから池田さんがうまく行って……。まあ顔に池田と書いてあるようなところがあったんじゃないですかね。奥さんに何かそういうことを言ったことがあるのですか。

池田 「どうも僕の後ろに池田総理の顔が見えて、二重写しになっているらしいんで、佐藤さん、お気に召さないみたいです」と（大平さんが）言っただけです。日米繊維交渉の関係で、通産大臣が大平さんから宮澤さんに代わった時でしたかね。

——宏池会のほうは、池田総理の後を前尾（繁三郎）さんが会長をされて、その後をちよつとトランプがあつて大平さんが継ぐわけですが、奥さんはその頃、非常に心配されたんでしょか。

#### 宏池会会長交替時に前尾氏と悶着

池田 それは心配しましたよ。前尾さんは頭のいい方で勉強家ですが、おやりになることがゆつくりなですね。それで、宏池会がガタガタしていると評判になったことがありました。私もどなたにも頼むわけにはいかないので、池田が一番信用していた桜田武さんを栄家にお招きして、「ご存知のように、宏池会がガタガタしていると言われています。これでは池田も浮かぶ瀬がないから、何とか

桜田さん、考えていただけませんか」と言いました。そしたら、桜田さんが前尾さんに「あなたは、勉強家で学者ではあるが、人を統率して行くあれ（手腕）はない」というようなことをおっしゃったらしいですよ。それで、池田の親友である前尾さんに、私、しばらく怨まれました。

——前尾さんは池田さんの親友だけでも、あんまりこの信濃町へこなかったですね。

池田　いいえ、幹事長時代は裏の座敷にきて、寝転んでおられましたよ。池田は「うちへあんまりこなくても、ワシは前尾の気持ちはよく判っておるし、前尾もワシの気持ちは良く判ってくれてるんだから、かまわんでいい」ということを言っていました。

——伊藤ブーちゃんの見方だと、「池田さんと前尾さんはいい、池田さんと宮澤さんもいい、前尾さんと宮澤さんもいい、だけど前尾さんと大平さんというのは何か合わないところがあった」というのですね。ブーちゃんの見方だと、話を持って行くときに、大平さんは「池田さんなら簡単に騙せるが、前尾さんは騙されない」と……。だから、前尾と大平は合わないんだ、ということをおられた。だから、（宏池会会長の）代替わりの時に、悶着があったのも、そういうことかな　と思えますがね。それから田中六（助）さんや何かが、「早く代わったほうがいいですよ」と、あの調子でガヤガヤ言ったわけですよ。

池田　ちよっと前尾先生はゆっくりしてらっしゃったから。まあ深慮遠謀で、お考えが深かったのですかね。

——それで、大平さんが総理大臣になった時に、奥さんはどんな感じしたんですか。

池田　くるべきものがきたと思えましたね。ご本人が仏様（池田）を拝みに、うちへいらっしゃっ

たと思います。

——ところで、(池田)行彦さんが選挙に出る出ないに関して、大平さんは「もうちょっと、俺の側で修行してから、やれ」と言われた。しかし、池田家といえますか地元は「もう、そろそろやっただいいんじゃないか」ということでしたな。増岡(博之)さんとの関係もあって、だいぶゴタゴタしたでしょう……。

池田 ええ。大平先生も増岡さんを立てた責任があるし、「もう少し待て、待て」と言われて……。何遍か私、大平さんのお宅に通いましたよ。「朝、八時にきてほしい」と言われて、七時半に行つて、近所の道に自動車を止めて、八時になるまで待つて、それからお伺いして……。

——奥さんがわざわざ行かれたら、(大平さんは)恐縮したんじゃないですか。

池田 恐縮も何も、「とにかく奥さん、もう少し待て」と言われるんだけれども、「それでも、あなた、私の生命がいつどうなるか分からないでしょう」ということで、頑張つて頑張つて……。そうしたら、最後は、大平さんが「奥さん、強いなあー、本当に困ったなあー」と言つて(顔を両手で覆われましたよ)。それから、高木(文雄)さんが(大蔵)次官だったでしょう、高木さんの所へも行きました。私、初めて大蔵省の次官室に入りました。高木さんは、びっくりされるといふより、うるさいオバサンがきたと思われたようですね。私としては、「何とか私が生きている間に、行彦を一人前にさせなきゃ」という気持ちで一生懸命でしたから……。

——しかし、出るとなつたら、増岡さんがおつても、大平さんは気持ちの中では、行彦さんをね。物心両面で応援されたんでしょう。

池田 えー、それは表立ってではできないけれど、いろんな形で応援して下さいました。それは、こちらが無茶をやったのですから、仕様がないけども……。人の気持ちというものがよく判りましたよ。

——それで、大平総理が昭和五五年（一九八一年）に亡くなられる。それから、十年後に志げ子夫人も亡くなられるわけです。奥さんからご覧になると意外な展開になったわけですが、どんな感じでしたか。

池田 本当に頼りにしている方々が、皆な亡くなられてしまい、淋しくなりましたね。だけど、「人生というものはこんなものですね」ということをしみじみ感じております。

——大平さんという人は、一般的に言って、どんな感じの人でしたか。

池田 野暮ったい人だけでも、本当に心の温かい方でした。行彦の立候補の時には少し嫌な思いをしましたけども、それ以外は、よくいろんな相談に乗って下さって……。

——池田総理がケネディ米大統領にお会いになる時に、奥さんに「是非、一緒に行きなさい」と推めてくれたのも大平さんだったそうですが……。

池田 そうです。岸（信介）さんの奥様が身体が弱くて随って行かれなかったでしょう。ですから、私も行かなくてすむと思つて、のうのうとしていたら、大平さんが、ある時やつてこられて「これらの国際的な首脳外交には、夫人が随って行かなければ駄目なんです」と言われたんです。それから、大平さんの奥様がこられて、「奥様、こんな指輪や時計じゃ駄目じゃないの。着物も帯も一流の所を紹介してあげるから」と言つて、業者を連れてこられたのです。私は、そんな（高級な）ものは必要なかったから、持っていなかったのですけれども……。大平さんの奥様は証券会社の社長令嬢でした

から、贅沢なもの、高級なものに対する目が肥えていて、貴重なアドバイスでございました。

——最後に、信濃町に頻繁に顔を出した田中（角栄）さんと大平さんとの人柄、考え方の違いなどについて、奥さんの忌憚のないご感想があれば……。

池田 やっぱり、大平さんはどしりとしていて、お考えが深いですよ。（田中）角栄さんは、彼処かこ此処こせわしない感じですよ。それでも、やることは実に立派になる。角栄さんが幹事長時代に毎日、うちにこられていたので、池田に代わって私がお相手をすることもありました。「奥さん、僕にコップ酒を持ってきて下さい」と言つて、いろんな面白い身の上話をなさるんですよ。それで、田中さんの奥様（ハナさん）のお嬢さんと、うちの遠縁の子とをお見合いさせて、結婚させたので、（池田と田中さんが）遠い遠い親戚になったわけですね。

（平成二二年二月二五日、池田邸で取材）

池田満枝（いけだ・みつえ） 一九二二年、広島県生まれ。山中高女、

金城女専に学ぶ。三五年、池田勇人氏と結婚。五九年長欠児童生徒援護会

（黄十字会・池田勇人会長）の会長夫人として、東京・山谷のドヤ街などで活

躍。六〇年池田総理とともに訪米、以後総理夫人として外遊に同行。六五年

池田総理死去後は女婿・池田行彦氏の衆議院議員当選を目指して大平宏池会

会長に働きかけ、七六年、初当選をかちとる。